

シンポジウム 2024 「子どもたちの多様性が生きることばの教育」

日 時：2025 年 2 月 24 日(月)10:00-16:40

会 場：オンライン ウェブ会議システム zoom

参加者：260 名(最大参加人数 関係者除く)

趣旨・概要

文化間移動をする子ども・若者のことばの教育は、かれらの社会的包摂に向けてどのような役割を果たし得るのか。本シンポジウムでは、外国人生徒等教育・日本語指導に関する自治体の教育行政における制度・仕組みづくり、学校における教育実践、そして、地域における支援に関する取り組みの現在を描き、トランスクルージョンという新たな視点を手掛かりに、社会的包摂に向けた社会的実践として「ことばの教育」を捉え直すことにした。

午前中には、主催する外国人児童生徒教育推進ユニットの令和 6 年度の事業報告を行った。第一分科会では、研究成果として日本語教育学会・異文化間教育学会にて発表した内容を報告した。第二分科会では、本年度着手した日本語プログラム開発プロジェクトの高校部会の途中経過として、開発するプログラムの内容構成と、開発中のプログラムについて、メンバーである高校教諭3名より報告を行った。午後には、開会行事の後、包摂と排除を巡るメタ理論に関する基調講演、そして、パネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、大阪・東京の教育行政・及び学校教育の報告と、クルド人支援の NPO 法人の活動報告ののち、それぞれの取り組みで推進された「社会的包摂」のプロセスを振り返るとともに、今後のことばの教育を社会的包摂のための社会的実践として展開していく上で求められること・期待することについてパネリスト間で、そして、会場とのディスカッションを行った。

プログラム

<午前の部>10:00-12:00

分科会1 本ユニットの研究成果報告

- 1)高等学校における「特別の教育課程」による日本語指導の実装化
見世千賀子・米本和弘(東京学芸大学)・河野俊之(横浜国立大学)
- 2)オンラインによる「子どものための日本語教育研修」の成果
原瑞穂・小西円・谷啓子・工藤聖子(東京学芸大学)

分科会2 高等学校の日本語プログラム開発(経過報告)

- 概要説明 齋藤ひろみ(東京学芸大学)
- 報告1 五十嵐恵美(愛知県立御津あおば高等学校)
- 報告2 佐屋麻利子(神奈川県立相模向陽館高等学校)
- 報告3 佐藤紘司(茨城県立石下紫峰高等学校)
- 質疑応答:青木由香(荒井学園高岡向陵高等学校)・笠井淳子(東京都教育庁グローバル人材育成部)・
築樋博子(元豊橋市教育委員会)・中村夏帆(岩倉市立南部中学校)

<午後の部>13:00-16:30

開会行事 ご挨拶 東京学芸大学 副学長 川手圭一

基調講演 「く包摂と排除」を超えるメタ理論—マイノリティの教育を巡って」
倉石一郎(京都大学大学院)

パネルディスカッション 「子どもたちの多様性が生きることばの教育—社会的包摂を目指して—」

- 本パネルの趣旨 コーディネータ:齋藤ひろみ(東京学芸大学)
- 「大阪における外国につながる子ども・若者へのことばの教育実践」 山田文乃(立命館大学)
- 「在日クルド人の子どもの支援」 山田拓路(認定 NPO 法人メタノイア)
- 「東京都における小中高を結ぶ日本語指導の仕組みづくり」 三田典子(東京都教育庁グローバル人材育成部)
- ディスカッサント:見世千賀子(東京学芸大学)

企画・運営担当より

本シンポジウムへのご参加、また、アンケートへのご協力、ありがとうございました。皆様からのご感想・ご意見について、アンケート結果を抜粋してご紹介いたします。

いただいたコメントには、本シンポジウムで得られた情報や新たな視点が、明日からの教育・支援の実践にとって励みになるとのご感想が多く、企画運営した者として、大変うれしく思います。また、本ユニットが、研修やこうした公開の場で意識してきた、「現場の多様性」「実践からの学び」「学び手の視点」を共有する機会になったようで、大きな成就感を覚えているところです。特に、「多様性が生きる」「社会的包摂」をことばの教育としてどう実現していくのかという本シンポジウムで掲げたテーマについて、お一人お一人が当事者として声を寄せてくださり、本ユニットが目指す多様な言語的文化的背景をもつ子どもたちの教育に関し、強く背中を押していただいた気持ちでおります。また、本ユニットの研究・開発事業の成果に対しても、様々な角度から批判的な捉えと共に、建設的なご提案もいただきました。今後の事業の運営に大いに参考にさせていただきます。ありがとうございました。

最後になりますが、ご登壇くださった皆様方には、事前の打ち合わせ段階から様々なアイディアを頂戴し、当日も周到な準備のもと充実した内容のお話をいただきました。心より感謝申し上げます。

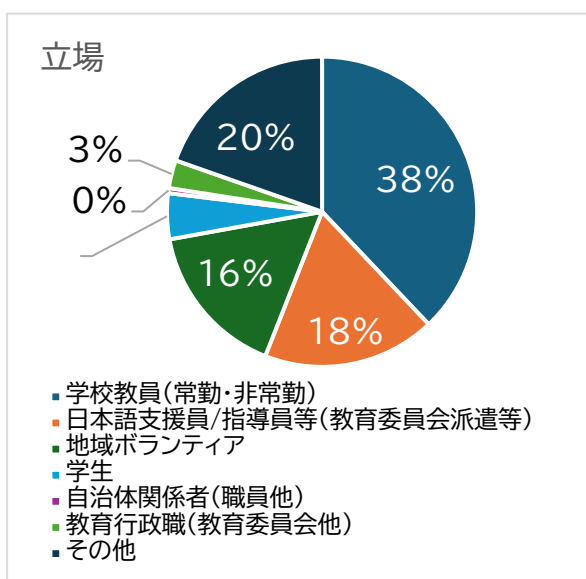
本ユニットは、令和7年度も研修・開発・調査研究事業を推進し、その成果をシンポジウムとして公開する予定です。本シンポジウムを通じて、新たに共有した課題「トランスクルージョン」の実現に向けたことばの教育を子どもたちやその担い手である教育・支援者側から、そして社会的な営みとして展開したいと考えております。引き続き、本ユニットの活動にご参加・ご協力いただけますよう、お願いいたします。

(ユニット長 齋藤ひろみ)

アンケート1(参加申し込み者 342 名)

1 参加申し込み者の立場と地域

300 人の定員に対し 314 名の申し込み、キャンセル待ちを含めれば 342 名の参加希望があった。314 名の申込み者の約 40%が学校教員、約 20%が日本語指導員・指導員、そして、約 15%が地域ボランティア支援者で、直接教育・支援活動をしている方が 75%であった。その他は教育行政職の方や学生その他、日本語学校の日本語教師等であり、幅広い層の方からの申し込みがあった。また、43 都道府県からの参加があり、10 名以上の参加があったのが 10 都道府県で、東京、神奈川、愛知、大阪と、いわゆる外国人住民が多数居住するエリアからの参加が多数見られる。地域別でも、全地域からの参加希望があった。多様な言語的文化的背景を持つ子どもたちのことばの教育・支援は、特定の地域に限らず、日本全体の関心事になっていることがわかる。



都道府県・地域別 申込者数			
都道府県(10 名以上)		地域別	
東京都	83	北海道	4
神奈川県	24	東北	11
愛知県	23	北関東	21
大阪府	22	北陸	11
兵庫県	19	東海	34
茨城県	14	近畿	60
京都府	12	中国	8
埼玉県	12	四国	8
千葉県	12	九州	24
福岡県	12	沖縄	4

アンケート2(当日参加者約 270 名、アンケート協力者 150 人)

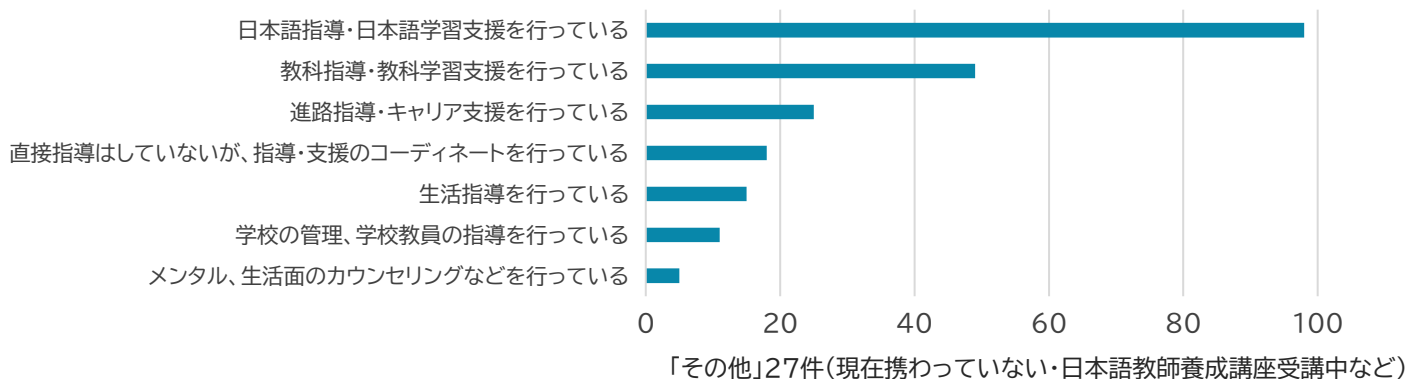
<当日参加者>

シンポジウム当日のプログラム別の参加者数は、午前の2分科会に 271 名、午後の基調講演に 242 名、パネルディスカッションに 247 名であった。参加申し込み者の 86%、77%、79%が参加したことになる。オンラインのイベントの参加率としては、高い数値であり、ここからも関心の高さと必要性・緊急性に対する強い認識が窺える。

以下、アンケートに協力いただいた 150 人の回答を抜粋して紹介する。

シンポジウム当日の参加者数	
午前 第1分科会	147
午前 第2分科会	124
午後 基調講演	242
午後 パネルディスカッション	247

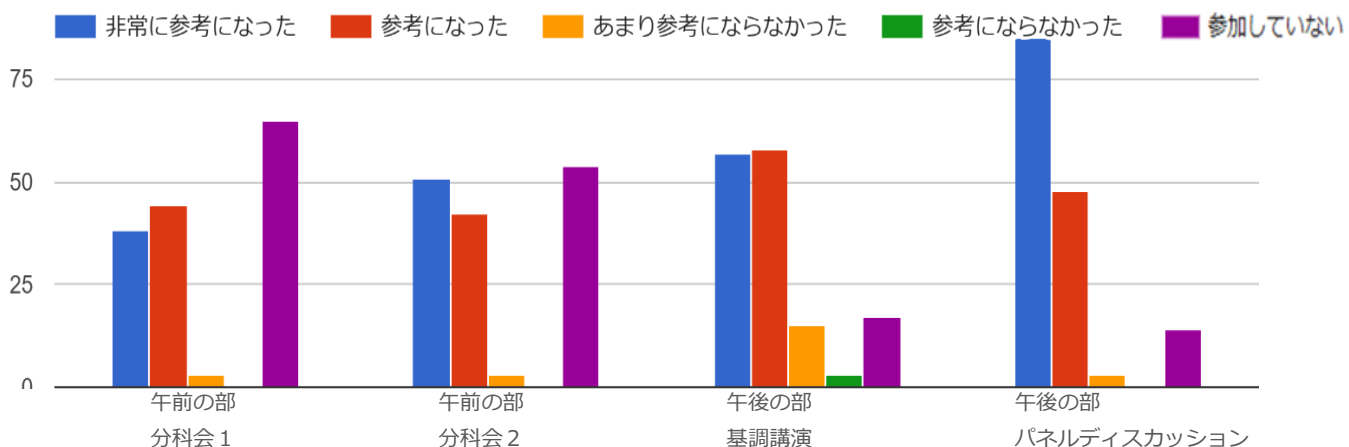
<参加者の子どもの日本語教育への関わり(複数選択可)>



アンケート協力者についても、立場については、参加申し込み者(314 名)の比率と大きな違いはなかった。ここでは、多様な言語的文化的背景をもつ子どもたちとの関わりに関する問いへの回答を示す。日本語指導・日本語学習支援を行っている人が圧倒的多数であるが、教科学習支援や進路指導・生活指導等、そして管理職・コーディネータ、さらにはカウンセリングなど、学校組織、地域で求められている多面的な関わりを担う人々の参加があった。なお、教育・支援を行っている子どもたちの年齢層は、高校生が約 23%、中学生が約 27%、小学生が約 28%、修学前の子どもが約 5%であった。

<満足度:参考になったか 各プログラムで選択>

各プログラムに関し「参考になったかどうか」を尋ねた結果である。いずれのプログラムでも、殆どが参考になったとの回答であった。特に、午後のパネルディスカッションでの満足度が高いが、次に示す、自由記述のコメントで、それぞれのプログラムのどのような要素が、参加者のニーズや関心に即したものであったのかを示す。



<自由記述 参考になった点>

参加者にとって参考になった点は、大きく次の３つのポイントに整理できる。それぞれの例を抜粋して示す。

- a 教育・支援の事例・具体的内容から学べた。
- b 他地域の状況、違い・課題を共有できた。
- c 「包摂」の捉え直しで新たな視点を得た。

a 教育・支援の事例・具体的内容から学べた。	
✓	それぞれの地域や学校で、実際にどのような取り組みがなされているのか、またどのような事例があり、どのような子供たちがどのような形で日本語を学んでいるのかということが具体的にイメージでき、勉強になるとともに、日本語教育に関わるものとして大変意義深い発表でした。
✓	高校で行っている具体的な日本語プログラムの内容が多様あること、また、それぞれの学校で工夫された内容であることが分かりました。日本語と同時に彼らの知的興味や知識も充たされる内容の授業を行っていくのは、準備等大変だと思いましたが、生徒にとっては素晴らしい取り組みだと感じました。
✓	高等学校段階において充実した日本語・学習支援が行われている例に接して、その気になればいろいろなとりくみができることを改めて知りました。このようなとりくみがもっと広がってくれば、高校中退率の低下につながると感じました。
b 他地域の状況、違い・課題を共有できた。	
✓	地域や学校の実態に即した取組を共有していただけたので、今後所管の学校でどのように活用するかを改めて考えることができました。まだまだ発展途上にある子どもの日本語プログラムについて、それぞれが試行錯誤しながら、その地域や学校、あるいは児童生徒たち一人ひとりに合わせたものを指導者や学校の先生たちが選択できるようになっていくといいなと感じています。そのためにも様々な取組を勉強したいと思っていますので、本日の提案は非常に参考になりました。ありがとうございました。
✓	各団体における実践や支援方法について知ることができ、自身の実践に反映したいと思いました。また、自治体によって異なる制度であるからこそ、いかにして自身の地域や学校に置き換えていけるのが大事だと感じました。
c 「包摂」の捉え直しで新たな視点を得た。	
✓	日本語指導を行ったから「包摂」、母語支援をしたから「多様性が生きる言葉の教育」と短絡的に捉えず、マジョリティ側の変革が必要だと感じました。「マジョリティが痛くもかゆくもないところ」でのマイノリティへの支援ではない社会的包摂とは何かが問われていると思います。
✓	「包摂」の定義に、心、動かされました。子どもたちの「ことば」の教育の問題を「日本語教育問題」のみに還元しているというご説明にも共感しました。
✓	「包摂」とは、「社会参加に向けて裾野を広げる」とことという認識でした。講演の中で、「中心が変わっていない」ことや、「意思に関係なく移動させられている」とことといった新たな視点をいただくことができました。今まで自分が行ってきた取り組みや支援の在り方をもう一度見つめ直したいと思いました。